

目次

頁

誠の言葉（副題―この追憶集ができるまで）	富永昌三	一
思い出すままに	銅手真吾	一
大崎大佐の略歴と思い出	大崎名香子	四
	小出正五	六
大崎大佐と実業団長原鴻太郎氏のこと	安倍剛造	一四
大崎行三君の思い出	磯部太郎	一七
大崎大佐を偲う	今村喜典	一九
大崎さんの思い出	及川礼次	二三
大崎政務部長の思い出	小笠原孝義	三五
大崎大佐の想出の種々	金子啓蔵	四二
大崎大佐の思い出	久保田博	四七
“親父”と私	小林善道	五一
大崎大佐の思い出	佐藤福嶽	五四

大崎さんと私	澄田智	五九
大崎行三大佐の思い出	高橋真清	六四
マカッサルの大崎大佐	中村達雄	六七
オオサキさん 南無	西山正尚	七一
素人弁護人	西山要	七五
大崎大佐の思い出	野口一夫	七九
大崎大佐の思い出	藤崎辰夫	八三
大崎さんを偲ぶ	藤田豊	八八
大崎さんの思い出	富和菊弥	九二
その時の人	保坂虎雄	九八
大崎大佐の思い出	的場忠彦	一一一
大崎さんの思い出	三戸文男	一一二
大崎大佐を偲ぶ	百田正弘	一一五
終戦時の追憶 生命の恩人大崎大佐	森田勝衛	一二〇
飛行機上のトラブル	安田三郎	一二五
大崎大佐の面影	山崎軍太	一二七

編集後記

（五十音順）
一一九

大崎さんは極めてスケールの大きい非凡な人で、その活躍の範囲が拡がるにつれその真価を発揮され、南方に來られました頃は最も油の乗ったとも云ふべきときで縦横にその手腕を振はれ、終戦に際してはセレベス全島に亘り軍官民各般の諸問題に就き普通では考へられないような数々の業績を残されたと聞いて居ります。更に特記すべきことは、戦犯者の弁護のため自らの危険を顧みず長期間に亘り敵地に残留され、類例のない驚嘆すべき成果を挙げられたことで、今や之を知る人も少なく埋れ去らんとして居ります。何んとかして之等のことを書き残し、御遺族の方々に差し上げ辱知諸君に御配り致し度いと念願して居りましたところ、今度その十三回忌に際し追弔会の開催となりこの刊行が十七回忌を期として実現されることになりましたことは喜びに堪えませぬ。

この友や 死したる後も 夢に立ち

我を慰め 吾を励ます

誠の言葉 (副題 追憶集がでるまで)

飼手真吾

十月初日(昭和四十八年)に小出さんから連絡があつて、富永さんが御病気で入院されたことを知り、早速十月七日の日曜日に三鷹の赤十字病院に取急ぎお見舞しました。お年がお年だからといさゝか心配しながらお訪ねしたのですが、富永さんは私の心配とは別に御元気で、お顔の色、艶もおよろしいのを拝見して心中ホットして一言二言お見舞の言葉を申上げるのをさえぎるようにして“小出君は全くけしからん。あれ程強く一再ならず言っておいたのに大崎の追悼文集が未だに出来上らない。”と言葉の勢いも強く痛歎されました。御元気とはいっても富永さんは数日前に大量に吐血をされて入院の上数日来一切経口の食事は摂っておられない状況であり、現に私がお訪ねした時も点滴による栄養を大きな注射針を左腕に差し込んで受けていられる状態でした。“もう何年になりますか。大崎の一三年の法事が済んで間も無しに、彼の追悼文集を作ることには決まっています。それなのに今日になってもそれは出来上らない。集まった二、三の文章も大崎の本当の姿を伝えていない。酒を飲んで豪快であつたとか、豪傑であつて細心だったとかいふのはそれはそれでよろしい。中には大崎を褒めながら自分を宣伝しているものもあるが、それもそれでよろしい。”そこまで言はれてから

溢れ出てくる涙をぬぐいもあえずベッドの上から私の手を強く握りしめながら、” 飼手さん、大崎の真骨頂はそんなところではない。分っていますか。” と富永さんはさめざめと涙を流しながら次のことを言われました。

戦争に負けてみんながみんな自分の責任を忘れて、我が身可愛さに一日も早くと内地え帰って行った時に大崎は自分で卒先してセレベスに残ったのです。彼は民政の責任ある軍人として自分が死刑になる危険のあることを十分知っていたんですよ。誰が見ても当時の戦犯裁判のやり方からすれば彼は殺される危険性のあることは明瞭だったのです。それなのに彼は彼の部下、或は部下でもない者の弁護のために残ったのです。当然後に残って然るべき者が誰も彼も上司のことは勿論のこと同僚下僚のことも構わずにみんな日本え帰ってしまいう時に彼はあえてマカッサルに残ったのです。大崎という男はそういう男なのです。そのところを書いて” あなたの主人、大崎行三という男はこういう男であったということを未亡人に知らせて上げたい。文集にして未亡人に上げたい。活版刷の立派な本になどする必要はない。ガリ版で結構、二、三十部でも結構、一日も早く飼手さん、文集を完成してやって下さい。大崎のためにお願います。” そして重ねて私の手を強く握りしめられました。

私は富永さんを御見舞にうかがったのにこのようなお言葉を受け、数年前から頼まれていた大崎大佐追悼の文章を未だに編集者の手許え差出していなかったことを心から恥ぢ入った。

しかも人一倍生前の大崎さんに可愛がってもらい、戦後も親しくおつきあいを頂いた私として富永さんに返す言葉も無く、悄然として病院を辞去した。

誠の心をもった誠の人の言葉は本当に有難い。

あなたとうと 神の心を友よきけ

誠の人の まことことの葉

(十月十八日記)

思　い　出　す　ま　ま　に

大崎　名　香　子

私は家から外に出ました大崎の事は何も知りませんが、家ではいつも子供をひざにのせて「腹の中に蔵建てた」と自分のお腹をなでなでお酒をのんでおりましたので子煩悩で親馬鹿の見本のような人でした。

手紙を書くことの大きらいな人でしたが戦地からの便りは必ず子供四人に一人づつ別々に書いてよこしましたのには感心いたしました。直子（末の子）が生まれました頃胸を患って自宅療養をいたしておりましたがその間一度もだっこしようといたしませんでした。日に日に可愛いくなくなってゆくのを遠くからながめて喜んでおりました。

昭和一七年の終り頃から病気が再発して軍医から自分の病状の余りよくないのを聞いて「動けるうちに最後の奉公を」と南方へ飛立ちました。私もこのままうち果てては如何にも大崎の人生がかわいそうだ、何とか戦地でとただただ無事に任地に着きます事のみ祈りました。

それが南方に行つてどうでせう病魔に打勝ちお務めを果して帰つてまいりましたのですから本当に運の強い不思議な人と思へません。その上得がたい友人が沢山々々できました。いつもいつもお名前を口にいたしたし南方での話を聞かせてくれました。さくになりまして十数年、

ご交際をいただきました月日よりずーと長い時間がたちましたのに今なほ皆々様のお心のすみに大崎が生きているということは本当に幸な人と感謝せずにはおられません。その上今回本まで出して下さるとは思もよらぬ事、故人共々手を合せるばかりでございます。

犬を寝ないで看病したり、色々なこともございましたが富永様から博愛院達識大観居士という名前をいただきました本人は一そう満足いたしておることと思えます。

願くば私のところを余り他人様にご迷惑をかけぬうちに呼んでくれることを頼みまして終りいたします。

（大崎大佐未亡人）

大崎大佐の略歴と思ひ出

小 出 正 五

私が仙台の旧制二高に入学した時、近くに住んでいた同校教授の山田善太郎先生のお宅を訪ねたことがあります。その時、談たまたま昔の学生気質の話になり、先生は中学時代のある親友のことを話されました。「昔は痛快な生徒がいたもので、彼は冬でもシャツを着ず、登校前に広瀬川で一泳してからくるのが日課だった。大橋を渡るときはわざわざ細い欄下の上を網渡りのように走り、人々が危いと注意しても下は水だから平気だといってケロリとしていた。彼のワラジばきも有名であったが劍道の寒稽古の時は防具をつけずに叩き合ひので見ている方がハラハラしたものであった。」と奇行の数々を話されました。「しかし彼は頭脳明晰で特に数学は抜群であった。陸海両方の学校に合格したが後者を選んで進んだ。恐らく海軍でも名物男になっていると思う。」と云われましたので私が「若しやその人は大崎というのではないですか。そんなら私の義兄になります。」と云いますと「世間は狭いものだ。」と笑はれました。

以上でも分かるように大崎大佐は仙台の産であります。

一、明治三四年十月一九日（一九〇一年）誕生

今泉良次郎氏の二男として生れましたが幼にして父の戦友で酒友の大崎氏の家に乞はれて養子に行き大崎の姓になりました。今泉の兄弟は姉姉妹の各一人で現在は姉の今泉威子さんだけが健在でおられます。生れて間もなく日露戦役となりますが出征するときの実父の姿を覚えているとよく話していました。養子に行っても殆んど実家に住んでいたらしく、その家は青葉城趾の天主台にあり、実父はそこにあった当時の招魂社の宮司さんをしておられました。峻険な山の上ですので水には苦労したらしく、その水汲みが彼の仕事だったようです。深さ二〇丈の井戸からの汲上げは大変な労働でしたが、ある時折角汲んだ水を少しこぼしたという事で母親に叱られた処、残っている水を元の井戸に投げ返してしまっただけという事で、それを見て母親は「この子は将来大変な者になるよ」といって驚かれたということです。

一、大正三年 仙台市立立町小学校卒

一、大正八年 仙台第二中学校卒

この中学時代が前記のように一番の腕白時代でした。仙台二中は仙台の名門校で昔より質実剛健をモットーにしておりました。五年生になると毎年蔵王山に遠足登山する例になっておりました。大正七年十月二三日には彼もこの遠足に参加いたしました。が頂上近くになって天候が急変し、大吹雪になってしまいました。この日に限って彼はたまたま隊の先頭にいたので無事目的地に着くことができましたが遅れた生徒七人と先生二人は遭難して不帰の客と

なりました。彼は遭難の報を聞いて救援に引返さうとしましたが先生の必死の阻止に思い止まったということです。この時引返していたら恐らく死んでいたであらうと自分でも云っていました。しかしこの時、腕白相手の一番の親友を亡くしました。吹雪で一先が見えず、大変な寒さで山鳴りが物凄く友の魂が呼んでいるようにきこえたとのことでした。後で彼が亡くなった日は十月二二日でその日と一日違いですが、何かその日と因縁があるような気がしてなりません。

一、大正十一年 海軍機関学校卒

この頃少し無理がたたつてか体をこわして士官候補生の遠洋航海には参加できなかったと聞いています。士官になって始めの頃は「江風」とか「五十鈴」など駆逐艦や軽巡が多かったようでした。そして各軍港、要港を順に廻っておりました。

一、大正十二年 海軍機関少尉

一、大正十四年 同 中尉

一、昭和三年 同 大尉

一、昭和十年 同 少佐

一、昭和十六年 同 中佐

後半になっては那智、最上などの新鋭巡洋艦や改装なった長門、伊勢などの戦艦勤務が多く

なりました。しかし病気がちで時々休養して陸上勤務（工作学校教官、浦賀造船監督官など）もいたしましたが大戦もたけなわになった昭和十八年、親友植松中佐の後任として南西方面艦隊民政府に赴任いたしました。

民政府では経済局の物質調整課長として南方での物動計画の策定と遂行に当たりました。その最も力を入れた仕事は何といってもセレベス島のゴマラ鉱山よりフェロニッケルを造って内地に送ることでした。ニッケルがなければ戦争ができず、しかも内地を含め占領地区ではここしかニッケルはできません。始め鉱石のまゝ送りましたが輸送が困難になり二〇数噸のフェロニッケルにして送ることになりました。主としてその精練のためにトンドンクラーの石炭開発や小野田セメントの建設が行われたのでありますが、更にその関連産業をと延長して行くと最後には石鹼やマッチ、紙、タイヤ、紡織など凡ゆる産業が包含されることになり、今まで何もなかったこの地に一大国造りが始まったわけでありました。しかも敵の爆撃下、人や物資のない所での国造りですから並大抵のことではありませんでした。しかし、よくまあ、終戦間際にあそこまで色々の工場や設備ができたものと感心いたします。

一、昭和十九年 海軍大佐（兵科、機関の別がなくなる）

戦争も益々激化して身近に迫ってきた昭和二〇年の始めにセレベス民政部政務部長として転出しました。そこでは主に決戦体制の確立と住民対策に力が注がれました。

そして間もなく終戦となりましたが今度は如何にして全員を無事に内地に帰すかで苦勞したことを思います。そして皆が帰った後も自分の身の危険も顧みず戦犯の特別弁護人として現地に残り、メナド地区を担当しました。昭和二三年帰国しましたがその時処刑の地の土を持参し靖国神社の拝殿の向って左の桜の柵内に宮司立会いのもとで埋めて奉納したと聞いています。また帰国時に厚生省よりもらった手当は全部戦犯遺族の方に贈られたようでした。内地帰国後は戦時中ジャワで万和公司におられた矢飼さんの経営する中和産業に入って、麻袋の製造に従事しておりました。

一昭和三年十月二日 逝去 享年五七才

突然の脳溢血でなくなられましたことは誠に残念でなりません。

戒名は富永閣下より頂きまして「博愛院蓮識大観居士」。墓は府中市の東郷寺にあります。以上は大崎大佐の略歴であります。

次に大佐の思い出話に触れたいと思います。色々の思い出の中でやはり酒に関するものが一番楽しく懐しく感ぜられます。その酒は実にいい酒で、決して乱れることなく相手を楽しませ、自分も楽しむというものでした。好物はすき焼でも自分で味付けをしましたが大変美味でした。また仲々の博学で、相手が学者でも専門的話をして相手を驚かせる程話題に豊富

でした。それに話にユーモアがあつて当意即妙にボンボン気のきいた言葉が飛出し、下手な寄席より余程面白いと思う位でした。そして興至れば歌も出しましたが、それが実にうまいものでした（これは人により評価が違ふようです）。「汽車よ々々々」から始まり「八木節」「田原坂」など、最後は「江差追分」になるのですがその追分の節廻しなどはその声といい、間といい誠に絶品でした。これは実姉の小原威子さん（現在今泉姓）が仙台出身の歌手として「ガラシヤ夫人」などの歌劇で名を馳せていることを知ってる私としては、流石に血は争えないと思われる程見事なものであります。

しかし更に酔が廻ってくる子供自慢になるのは致し方ないとして、最後には家で飼っている雑種の犬や猫の自慢にまで及ぶ処はその情の深さでありました。また「これが最後の一本」といつてからそれが続いてそれまでの酒の本数より後の方が多かったなどということもありました。しかし感心なのはいくら酒が深更に及んでも朝は早く、必ず時間には役所に出勤したということでありました。

また酒を飲みながら処生訓的な話もよくいたしました。今でもよく覚えてるのに次のようなものがあります。「数学でも仕事でもまづ第一に進んでる方向が間違っていないかをよく吟味せよ。(+)と(-)とは逆の方だし、誤った方向だと努力すればする程飛んでもない処に行ってしまうからである。次には桁を間違えるな。数字が如何に合致しても小数点の打ち処

が違っていれば大変な間違となるからである。」また「例へば〇の処が中庸を得た点と思はれるとき他の一〇人が(+)10を主張すれば自分一人は(+)100を主張しなければ〇点でバランスがとれない道理である。たといそれが突飛な意見であっても勇氣をもって主張しなければならぬ」ということも云はれました。

彼自身会議などで時々意表をついたようなアイデアを出して人を驚かすことがありました。がこれも云ってみればこの法則にのっとった実に良識的なものであったわけでありませう。そして何といつても偉かったと思うことはその中庸が何処であるかの価値判断の基準が正確で高邁だったことです。余り高邁すぎて姉も苦勞が多かったと思えますがその高邁さの中にも庶民性があり誰でもその懐に飛込むことができました。戦後仙台二中が野球で甲子園に出場した時、台拓のセレベス支店長だった岩田さんも同校の大先輩でしたがその岩田さんが商売を休んで甲子園に応援に行つたという話をきいて我が意を得たりと大拍手を送つてましたがそういう人情の心意気といつた面の強い人でした。それで同じ軍人でも威張つた者を嫌い、常に民間人の味方に立つて仕事の世話をいたしましたし、また原地人をも同等に扱い、その独立運動の援助に多大の努力を惜みませんでした。私も小さい時から特に可愛がられ、中学の夏休みにはやれ舞鶴だの横須賀などとその勤務地に一夏楽しく遊ばせてもらい、長じては何かと相談相手になつて色々と面倒をみてもらいました。それで私を大崎の長男の上の特男

だと呼んだ人がいますが全くその通り世話になりました。それだけに一層、感謝と尊敬の念を禁じ得ない次第であります。

(四八、一〇、二〇記)

結する事に決した旨語られ、私も其の一員として大佐と行動を共にせよとの指示があり私は喜んで之に参加する事となった。

若し敵が上陸作戦を展開していたら我々は、大佐と共に枕を並べていた事であろう。

敗戦後、敵日を経て金子啓蔵君が緊張した顔つきで私の宿舎へ来て、愈大佐と共に自分等夫妻も自決する事に決したので妻が今白カタビラを縫ってると報告して来た。

全く大佐らしい最後かも知れんと深い感動の裡に金子君と其の夜更けまで語り合った。結局上司よりの勧告で実行に移されなかつたが彼の面目凜如たるものがある。其の後大佐は進駐軍との連絡を自ら買つて出られ泰然自若として任務につかれ我々はキャンプで彼から進駐軍の情報を聞いていたが或る日「山崎君、君も近い内に戦犯容疑として逮捕命令が出さうな雲行だ、一応覚悟してをきなさい」と事前に心の用意をさとされたが、我々が帰還船に乗船後、大河原長官以下我々十数名の逮捕命令が出た事を途中で知つたが之も彼の影の力かも知れないしこの事を喜んで居られた事であろう。

其の後大佐も帰還され「戦犯捜査も打切りとなつたから、君はもう大丈夫だ」と吉報を告げられたが其の後私は再度マカッサルへ連行される事となつたが幸い不起訴となり無事帰国出来たが之も蔭ながら私を庇つて下さつた大佐の御蔭であると今以て感謝している。(終り)

編 集 後 記

この追憶集ができるまでの経緯については御手さんが本文にて詳しく述べられている通りでございますがお蔭様で皆様のご協力により今回漸く出版まで漕ぎつけることができました。これは先づ第一に沢山な方々から貴重な玉稿を頂戴できた賜でございます。厚く御礼申し上げます。

それにしましても、こんな出版が遅れましたことは誠に面目なく、特に最初に寄稿して頂きました方々のうち故人になられた方もございますので益々申し訳ない次第で、深くお詫び申し上げます。お亡くなりになられました方は及川礼次氏、金子啓蔵氏、佐藤福嶽氏のご三方でございます。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

この文集の表紙の題字「仏心」は鎌倉円覚寺管長 朝比奈 宗源老師の筆になるものでございます。

実は表題の揮毫を富永先生にお願いしようとお伺いいたしました処、先生は固辞されて、替りに「老師の『仏心』即ち『ほとけ心』が大崎さんの性格や行動にピッタリするように

思はれるが、「いかがだらうか」という提案がございましたが、誠的を射たものと思いましたが、ので早速使用させて頂くことにいたしました。

文章の配列につきましては発起人会にて始めの四編を最初にいたしました、それから五十音順ということにさせて頂きました。

次にこの文集の出版にあたりまして故人と特に関係の深かったと思はれる方々にその費用の賛助をお願いいたしました処、忽ち予定を上廻る金額のご支援を得ましたことは誠に感謝に堪えません。本当に有難うございました。

最後に、この文集は大崎大佐の遺徳を偲び、世に伝えんとするものでありますが、戦時中の南方（セレベス）の軍政や終戦時の歴史の一面を示す貴重な記録でもあり、また、大佐のヒューマニテイ（仏心）は最近の経済状況に見られる利己的世相に対する反省のよき指針でもあると存じますので、広く多くの人に読まれますよう希望して已みません。

（小出生）

なお大崎大佐のご遺族の住所は

〒249 神奈川県逗子市桜山一丁目六ノ九
大崎 名香子

電話（〇四六八一七一一二四七二）

（非売品）

海軍大佐 大崎 行三 追憶集

昭和四十九年二月二日

編集者

〒113 東京都文京区本郷三丁目一三ノ九
小出 正 五

電話（〇三三）八一五一〇〇八八

出版代表者

〒168 東京都杉並区高井戸西一丁目二五ノ三
飼手 真 吾

電話（〇三三）三三四一五六五〇